

緊急対談

原発いじめ問題から考える これからのニッポンの教育 —新・学習指導要領を踏まえて—

東日本大震災、そして福島第一原発の事故から6年が経過した。“絆”という言葉があれほど耳にしたのも今は昔、自主避難した生徒への“原発いじめ”が各地で次々に発覚している。なぜこのようなむごたらしいいじめが起こるのか。告示されたばかりの新しい学習指導要領は、いじめ問題などの教育課題に対して何を示していくのか——。

いじめ問題に一言を持つ義家副大臣と、新潟でも起きた原発いじめに強い問題意識を持つ上越教育大学・川崎学長が、この問題を契機としてこれからの教育を語る。

まとめ／編集部 写真／高橋 学



文部科学副大臣

義家 弘介 *Hiroyuki Yoshiie*

1971年長野県生まれ。1988年北星学園余市高校に編入。1995年明治学院大学法学部卒業後、母校・余市高校の教員となる。その様子がドキュメンタリー番組として放送され「ヤンキー先生」として話題に。横浜市教育委員を経て2007年に参議院議員初当選。2012年に衆議院議員当選。2015年秋に文部科学副大臣に就任、現在は2期目。

上越教育大学学長

川崎 直哉 *Naoya Kawasaki*

1952年新潟県生まれ。1975年早稲田大学理工学部電気工学科卒業。同大学大学院修士課程を経て、1980年同大学大学院理工学研究科博士課程電気工学専攻修了（工学博士）。高知大学教育学部を経て1990年より上越教育大学へ。1997年上越教育大学学校教育学部教授。2004年～2013年同大学副学長。本年4月より第8代学長に就任。

原発いじめを防ぐために必要なもの

義家 まず、横浜や新潟などで明らかになった原発に関連したいじめについて、直接指導を行った立場としてお話をさせていただきます。世界の文明史を見ると水源を奪い合い、支配しながら文明がつくられてきた側面がありますが、国土のうち1／4しか平野部がない日本は、みんなで水源を分かち合って歴史をつくってきた。日本は奪い合いの国家ではなく、分かち合いの国家であったはず。それが6年前、東日本大震災によってふるさとに帰れない人たちがいて、さらに同じ国に生きる人の境遇に思いを致せなくなってきた人がいるのなら、これは大変に遺憾です。いじめ問題というだけではなく、これまで助け合ってきた日本国の根幹に関わる問題。いまだ避難生活を送る人がいることを受け止めて受け入れて、どう支えていくかを継続的に丁寧に教育していかなければ。極論ですが九九を覚えるよりも大切なことだと思います。

また原発に限らず、ふるさとに帰りたくても帰れない子どもが疎外感を感じている現実がある。だから「原発いじめ」という言葉に私は違和感を持ちました。福島県の帰還困難区域から避難している子だけへのいじめだとして、ある意味で矮小化されがちですがそうじゃない。本来「震災避難者いじめ」だと捉えるべきだと思います。

そんな中で教育現場が特定のイデオロギーによって正しい科学教育を行わず科学的エビデンスに基づかずに、「放射能は大変恐ろしいもので、健康被害につながる」「原発は危ない、危ない」と言い続けたら、子どもたちはそのみを鵜呑みにしてしまう。避難してきた子どもをその「危ない」ところからやってきた子ども」と解釈することは想像に難しいことはありません。だからこそ、「彼ら自身には何の問題もない。むしろそのようなレッテルを貼ることをしてはいけない」という教育を行うべきだと、私は思うんです。

そして被害生徒に対する「賠償金があるだろう」という発言。根っこにあるのは保護者の意識です。保護者が家庭内でそんな話をしていたら、まだ未熟な子どもはそれを「事実」として吸収してしまう。つまり変わるべきは子どもの前に大人。まずは教員や保護者が認識を変えて、子どもに向き合うことが大切だと思います。

川崎 私も学長就任時の記者会見における質疑で話したんですが、特に小学校の教員はある程度の正確な科学知識を身に付けておかないと、放射性物質に対する誤解を助長するようなことになってしまう。教師がしっかりと知識を身につけて、それを子どもたちに分かりやすく正確に伝えることができる力量があれば、誤解に基づくいじめは減るだろうという内容の発言をした覚えがあります。いまは小学生でもスマホを持っているので情報の拡散がとても速い。一度、誤った情報がパワッと広がると、それが一つの要因としていじめにつながりかねない。また一部の小学校教員で、理科を苦手としている人が多いように感じます。上越教育大学ではそのような学生に対して、すでに退職された教員で理科専門の方に指導をお願いしています。学生が大学の授業の合間で時間が空いている時に、正規の授業とは別に特別な指導を受け、一定の基準レベルをパスしたらOK、としています。理科は授業で実験をするので誤った実験を行うと、子どもにけがをさせたり、配線を間違えると火が出たりする危険性がある。そんなことも含め、あるレベルまでは正確な科学的知識を身に付けてほしいというのが本音です。

基礎知識をおろそかにしてはいけない

川崎 「これからの教育はアクティブ・ラーニング」と言われていますが、子どもたちがアクティブ・ラーニングを通じて学ぶためには、まず教員が「アクティブ・ラーニングとは何ぞや？」を知らなければいけない。本学ではカリキュラムを工夫し、授業でもそれを積極的に取り入れるようにしています。学生同士である課題について話し合い、それをみんなの前で発表し評価し合う。私は電気電子工学の授業を受け持っているので、座学といえども「これはどのような仕組みなのか。ちょっと考えてみよう」と言って考えさせ、「じゃあ、実際にやってみなさい」と配線をさせるなど、アクティブ・ラーニングの初歩的なことも行っています。実際に手に取って触って、意見交換するのが大切。座学で話しているだけだと眠くなってしまう学生もいるので（苦笑）。教員養成の授業も科学的なものを含め、実体験を通して学んでいかないといけないと思います。

義家 さきほど触れたような放射能の影響と同様に、教

学び合いに効果はあるが 時間のかけかたが課題（川崎）

ってくるでしょう。だからこそ、教員は本当に学び続けないといけない。それを止めたら、新しい知識は使えないし、子どもにも教えられない。教員がまず自分自身で学んで、学ぶ面白さや素晴らしさがわかれば、子どもにも伝えられると思うんです。本学は大学院中心で、現職教員の方に2年間来ていただいて再研修していただくような大学ですが、もっとみなさんが来やすい環境にしたい。教育委員会からの派遣だと、残念ながら本当にごく一部の方しか来られないので、派遣以外の形でもいつでも勉強していただけるような環境にしたいと考えているんですけれど。教員免許更新講習も10年に1回、30時間の講習を受けていただいているんですが、この時間数では本当にさわり程度しかできない。正直言って、もっと時間をかけて新しい知識を身に付けていただきたいと思っています。

義家 私も昨年、頑張って免許更新しましたよ（笑）。
川崎 そうなんですか！ それはそれは……（笑）。

教育は人間にしかできない仕事

川崎 2030年になると、いまある職業の半分以上はなくなっている可能性があって、いまの子どもたちが就く職業のおよそ半分が新しい職業になっているという話があります。そうであれば現段階で未来を正確に予測するのは非常に難しい。ただひとつははっきりしているのは、子どもたちが大人になった時には、自分たちで答えの決まっていない課題を見つけて、それに関する情報を集め、人とのコミュニケーションを取りながらそれを試行し、最終的に判断して、実行していく。場合によってはほかの人に情報を提供したり、表現したりする必要もあるということです。

たとえばAIは、現時点でさき将棋や囲碁で名人に勝つくらいですから、今後もものすごいスピードで進化していきます。東大を受験する“東ロボくん”も国語の記述など人間が考えるような部分はまだまだみたいですが、単純な処理はすぐに学習するでしょう。あっという間に



左：義家氏 右：川崎氏

す。国として数学に力を入れて数学が発達し、結果的にプログラミングなどの分野における成長につながった。インドの情報産業の伸び方は本当にすごいですよ。

ただ、アクティブ・ラーニング導入に際して現場の先生方は不安を抱えています。それは、ひとつのことを教えるのに時間がかかるからです。子どもたちがやりとりして、まとめて、発表するという流れになると、いままでの単元を同じ時間でこなせるのかと。そのような問題もこれから噴出するだろうと思います。アクティブ・ラーニングのためには、教え込んではいけないとなると、これはもう本末転倒。だからバランスを考えて実施しないと掛け声倒れになる。これから本格的に動き出して、修正しながら進んでいくと思うんですけれど。ただ、学び合いというのは現場で実践してみると、やはり効果があるようです。子どもたちがお互いに教え合う学習面でも、コミュニケーションを取るという面でも意味がある。いままで理解しないままに来ていた子どもが、友達から教えてもらうことによって、理解を深めるわけですからね。やはり、時間とのトレードオフという課題があるかと思っています。

義家 いまのは大変に的を射たご指摘です。2000年代に入ってから「情報科」が増え、小学校なら「外国語」が増え、「総合的な学習の時間」が増え、学習内容が3割増えていった。何が削られたかという点、何も削られていない。負担だけがギュッと濃縮されて、手一杯になっているんですね。私がいち教員として率直に意見を言えば、

アクティブ・ラーニングのためにも 基礎知識は必要（義家）

員に基礎的な知識がなければ、学校現場で行われるアクティブ・ラーニングもイデオロギー闘争に巻き込まれる危険性がある。主体的・対話的で深い学びをするには、基礎となる学力・知識がないとできないんですよ。これは学校教育も同じで、だから今回の学習指導要領改訂では学習内容を削減しなかった。きちんと基礎知識を子どもたちに与え、その上で自らの考え方や関心を追究する。本来の教育のあり方をあらためて再構築しました。

道徳ひとつ取ってみても、これまでは伝記や読み物を読んで感想を書いて、終わり。そうではなく「こんな考え方や事象があるが、それについてキミはどう思うか。何が問題だと思うのか、問題ではないのか」などと具体的な事象に対して必要な知識を与えて、みんなで話し合う。極端な話、小1生に「さあ、アクティブ・ラーニングをしよう」と言っても、彼らの興味・関心は教室の窓の外にあったりする。「学問って面白いんだな」と感じるために基礎知識を絶対に疎かにしてはいけない。

教員になる人にも基礎知識を教えること、反復させることを避ける必要はないと思います。まだ一部では「詰め込みかゆとりか」という論争の残滓が残っているようですが、「アクティブ・ラーニングのためには、座学で基礎知識を教えてはいいけないのかな」なんて萎縮する必要はない。より積極的な授業を展開するためには基礎を教えるべきだし、宿題だって出してもいい。建設的な学び合いをするためには、しっかりしたエビデンスやデータが必要だという点は誤解しないでほしいですね。

学びの質を高めるために何をすべきか

川崎 いま副大臣がおっしゃったように科学技術が進んで新しい発見も増えています。昔に比べて教える内容が非常に増えているわけですから、基礎知識がないと子どもたちはディスカッションさえできない。だからこそ基本的に覚ええないといけない部分はたくさんある。たとえば九九は、いままで同様にお経のごとく唱えて覚えなければいけない。インドでは九九を19×19までやっていま



挑戦して失敗して それを乗り越えていく学びを（義家）

人間に追いつくはず。AIでカバーできる仕事ではすぐにAIが普及していくでしょう。2020年には電子教科書を採用する話もあります。タブレットなどは非常に便利ですね。鳥について調べれば、画像や声が出て、紙ではわからないことがすぐにわかる。そのような便利なものはもちろん活用しますが、人間にしかできないことは必ず残る。そこを大学でしっかり教えられるようにしたいですね。

義家 「人間だからこそ」というものはたとえば“感動”。われわれ人間は、体調が悪い日もあれば判断ミスもあります。その判断ミスの一手が負けた原因になり、ひらめきの一手が勝つ要因になる。そんなドラマを含めて囲碁や将棋の世界がある。AI同士の囲碁をテレビでやっても面白くないので誰も見ないですよ（笑）。

昨今の報道に耳を澄ますと、「教師の仕事は大変で、忙しくてモンスターペアレントもいて……」と教職に対する非常にネガティブな情報が飛び交っていますが、私の実感から申し上げますと、これほど素晴らしい感動的な職業は世の中にはないと思います。人間にしかできない仕事。人間が人間を育てるといって、最も重要かつ感動的な営みです。もちろん機械同士ではないですから失敗はある。しかし、その失敗を乗り越えながら教員としても成長していくんです。私は『教職課程』もずっと読んできましたが、ポジティブな発信や感動がたくさんある。それを見れば「教育は人間にしかできないんだ」とおのずと答えが出てきます。教員はネガティブな一言で生徒を傷つけることもあるけれど、生徒ひとりの一生の座右の

日本の教員はもっと世界から 評価されるべき（川崎）

銘になる言葉もまた、紡ぎだします。その意味では、教育をAIのように考えるより、より人間くさく考えて、人にとって財産として残る教育をすべきだと思います。

私が世の先生方に本当に心から言いたいのは、「胸を張っていただきたい」ということ。日本は世界でも最も優れた初等中等教育を有している。もちろん現状でも課題はありますので、課題に対して学び続けて成長していかなければならない。その成長は誰のためか？ 自分のためではなく、目の前にいる子どもたちのため。そのためにわれわれ教員は成長していく。これが原点です。

財務省は短期的に物量を見て「エビデンスが云々」と言うけれど、私は高校を1年でドロップアウトしました。あの時点での私への教育は、財務省の理論から言えばダメな教育だった。しかしそのおかげで自分の意志で学びなおし、一つひとつ成長し今日まで来た。じゃあ政治家になって文部科学副大臣になって成功か？ そんな簡単なものではないんです。厳しい判断を迫られ、挫折が多くても、それも糧にしながら成長していく。何度でもやりなおしができる。失敗した時こそ成長の最大のチャンスです。

だから先生方あるいは教員を目指す方たちも、「失敗しないようにするにはどうするか」という学びではなく、チャレンジして経験して失敗して、それを乗り越えていく学びをしていきましょう。教科指導もいじめ指導も「こうやって教えたならもっと伝わったはず」「こう指導したら問題解決も早かったのに」などと反省し、それを財産にして取り組んでいくべきだと思います。

これからも学び続ける教員のために

川崎 日本の教員は、ほとんどの方がたいへん頑張っていて、優秀な人も多い。日本の教員制度ができた当時は、世界的に見ても日本の教員はトップクラスだったと個人的に考えています。ところが、たとえばアメリカでは州によって若干異なりますが、教員となるための基礎的な内容を4年で学び、そのうえ大学院で2年間、専門職としての教える技術などを学んで教員になるシステムをつくり、終身雇用で働くには修士の学位を求められるなどの施策の結果、教員のステータスは高くなりました。日本はステータスやシステムの面で、海外に抜かれてしまっているのが非常に残念。新構想大学などでの再研修システムはできましたが、全体から見ると非常に小さい割合です。医師や弁護士などは本当にステータスが高く尊敬されています。教員だって内容的には負けていないんですよ。日本の将来に関わる専門的な仕事をしてるわけですから、もっとステータスが高くて社会的に認められるべき。しかし、副大臣がおっしゃったように、日本の中ではそれほど周りから評価されていないというのが、個人的にはさわめて残念です。

義家 「本籍は現場にありながら学べる」教員派遣制度というのは秀逸な制度だと思っています。大学院に行って、子どもがいない中で学んでもそれは机上の空論。子どもたちとの実践が日々繰り返されながら、より高度な教育方法を学んでいく。これをしっかり機能させること

原発いじめ問題から考える これからのニッポンの教育

ができれば、あらためて世界に誇る教育だと言えると思うんです。ただ、いかんせん現実は一ひとりの教員にのしかかる重荷が大きすぎて「もっと教師として成長するために大学院に行く」という踏ん切りがつかない。これは中長期的に言えばとても重要な制度なので、もっと積極的に「子どもたちのためにもっと学びたい」と教員が思えるような時間、教育に没頭できる時間を保証してあげなくてははいけませんよね。

川崎 学びたい教員はたくさんいるんです。休業制度を使って、無給で大学院に来て学ぶ人もいるくらいに。ただ時間的な余裕もなく、（教育委員会も）派遣が難しい。条件が整わない人が多くいるので、大学としてはそのような人向けに、たとえば夜間に来ていただけるような環境をこれから構築していきたいと考えています。

義家 それがひとつのキャリアパスになり、そして自信となって成長していく。スーパーグレートティーチャーになり一定の年齢になれば、今度は逆に教職大学院などで教える。教育はローテーションの営みなので、「自分だけが教員として完成して終わり」ではなく、次に続く人をしっかりと導いていかなければならない。子どもを導くのと同じように先輩教員たちは自身を超えていく後輩教員を育てる責任があります。後輩が先輩のキャリアを超えてくれないと、高次の教育は生み出されませんからね。これからは本当に「教員の質をどのように追求していくか」という時代に来ている。そう感じています。

（4月18日、文科省にて収録）

対談を終えて

教員養成の頼もしい応援団

義家副大臣が心を痛めているいじめの問題から始まった対談であったが、副大臣ご自身の若い頃の経験や高校での教職経験から教育について語られる言葉は重く、我々が使命としている教員養成の今後の方向を示唆するものであった。と同時に、副大臣は教員が直面している現実的諸問題に対し、教員の立場から理解を示す頼もしい応援団（?）であり、人を思いやる心、違いを認め合う感性などを育てていかなければならないことも気づかせてくれる対談となった。（川崎）

